

経営情報学会 2022 年度年次大会

向日恒喜（むかひ つねき） 中京大学
柿原正郎（かきはら まさお） 東京理科大学

1. 大会概要

2022 年度の年次大会が 2022 年 5 月 29 日（日）の午後にバーチャル空間の oVice を使って開催されました。エイムネクスト株式会社の清威人社長をお招きしての招待講演とパネルディスカッション、そしてポスター発表セッションのプログラムが設けられました。

今回のテーマは「空間を超えた萌芽の育成」でしたが、このテーマは、JASMIN が「萌芽」を最近の活動の柱の一つとしていること、講師の清社長が IoT などを活用しながら地方都市の農業などの社会課題に対する萌芽的な取り組みをされていること、ポスター発表や oVice での偶発的な会話から萌芽が生まれることへの期待から、設けられました。

大会には 135 名に申し込みをいただき、120 名程度の方に実際に参加いただきました。今回、初めて oVice を使ったこともあってか、昨年に比べると参加者が減りましたが、一方で、会場のさまざまな場所で参加者同士の会話が生まれていました。

2. oVice での開催

新型コロナウイルスの感染状況が読めない中、今年の大会も、一昨年、昨年と同じく、オンラインで開催することとなりました。Zoom での大会は自宅などから気軽に参加できる一方で、大会の良さである参加者同士の何気ない会話が生まれにくいとの問題がありました。特に、ポスターセッションは通常の口頭発表のように一方的な発表になりがちで、対面のポスターセッションのように気軽にポスターを見つつ立ち話をするのが難しいとの課題がありました。そこで、今回、バーチャル空間で、アバターを操作しながら近くの人と会話することができる oVice を使って大会を開催することにチャレンジし

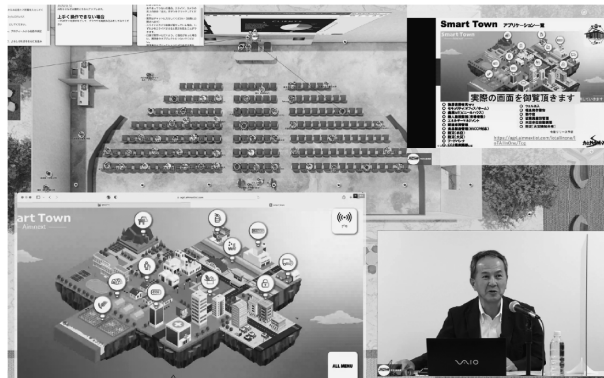
ました。

多くの方々が不慣れなツールを初めて使うことから、事前に大会関係者で oVice のスペースで何度もミーティングを持ち、また研究室の学生や JASMIN の学生萌芽研究部会の学生達にも参加していただき、問題点を洗い出しつつ大会のシミュレーションを行い、マニュアルを作成しました。また発表者や参加者のために、大会前にも練習でスペースにアクセスできる期間を設定するなどして、oVice に慣れていただく機会を設けました。さらに当日は、学生萌芽研究部会の学生達にもサポートについていただき、不慣れな方々への対応をさせていただきました。

そのような準備の甲斐もあってか、当日は操作に戸惑う方がおられたものの、ポスター発表などで大きなトラブルもなく、なんとか無事に終えることができました。そしてアバターを介して参加者同士で立ち話をしている姿も見られ、Zoom 開催では得られにくい交流の機会を多少なりとも提供できたようです。

3. 招待講演とパネルディスカッション

恒例の招待講演は、エイムネクスト株式会社の清威人社長に「宮崎県高鍋町におけるスマートタウン構築：“知恵”と“平易な先端技術”の融合による社会課題解決への挑戦と、結果としての事業開発」というタイトルでご講演いただきました。エイムネクスト社は、主に製造業向けのシステム開発、業務改善コンサルティング、スマートファクトリーの推進などの領域でビジネスを展開されており、国内にとどまらず東南アジアや中南米などの地域におけるグローバル化支援も行っているユニークな企業です。本講演では、同社が 2018 年より宮崎県高鍋町と IoT に関わる包括連携協定を締結して進めている



清威人氏による招待講演



パネルディスカッションの様子

ローコスト型地域IoTインフラ構築の取り組みについてお話をいただきました。同社は、人口減少や需要の縮小などの地方都市の課題解決を、自社の事業活動と両立しながら実現する方法を模索し、LPWA（Low Power Wide Area）ネットワークの基地局となる装置を高鍋町内の各地に設置することで、高鍋町のほぼ全域でIoTデータ収集ができるようにし、農業分野や行政サービスでの利用を実現しました。同社のこうした取り組みは、まさに社会課題に対するITの利活用の萌芽的な取り組みであると思います。清社長には、高鍋町で実際に稼働しているIoTシステムのデモも交えていただきながら、約45分の大変刺激的な講演をいただきました。

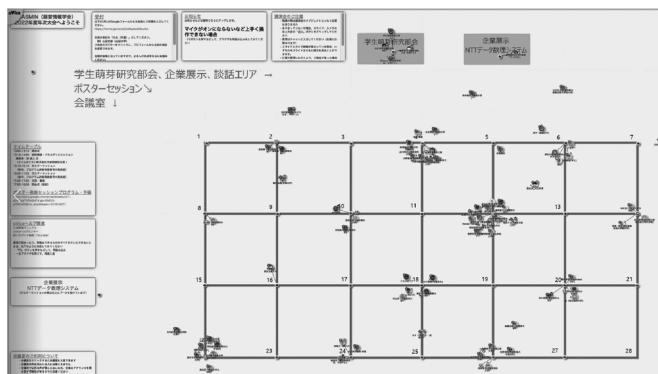
清社長のご講演のあと、田名部会長、大江副会長を交えたパネルディスカッションを行いました。高鍋町におけるエイムネクスト社の「モノとデジタルを活用した、自社の事業活動を通じた社会問題解

決」の取り組みは、JASMINの「人・情報・経営を繋ぐ」という学会のテーマともとてもつながりが深く、田名部会長、大江副会長からさまざまなコメントや質問が清社長に投げかけられ、それに対して清社長も講演内では触れられなかった取り組みの背景や現場での葛藤などもお話いただき、あっという間に予定の45分が過ぎてしまいました。

会長、副会長を交えた招待講演後のパネルディスカッションは、年次大会では初めてといってもよい試みでしたが、想定以上にインタラクティブなやり取りからのテーマの掘り下げが見られ、視聴されていた参加者の方々からも、普段なかなか話を聞く機会のない会長や副会長の考えも聞けてよかったとの声もいただきました。改めて、今回大変刺激的な講演をいただきましたエイムネクスト社の清社長に心より御礼申し上げます。

表1 優秀萌芽研究賞受賞者リスト

SNSの惰性的「いいね」習慣が調査における推奨意向の回答に与える影響	加藤拓巳（明治大学）
多様な背景のメンバーのプロジェクトにおけるコンフリクト課題の抽出 ―オープンイノベーションの遂行のためのコンフリクトマネジメント手法の提案に向けて―	丸山大輝（東京都立産業技術大学院大学）、岩村光貴（東京都立産業技術大学院大学）、石田秀一郎（東京都立産業技術大学院大学）、大槻亮輔（東京都立産業技術大学院大学）、三好きよみ（東京都立産業技術大学院大学）
企業における対面コミュニケーションが生産性に及ぼす影響	矢田昇平（筑波大学 博士後期課程社会人学生）、加藤大望（筑波大学 博士後期課程社会人学生）、倉橋節也（筑波大学 教授）
企業のNPO連携活動が社会的評価と本業に与える影響	岡本育実（東京理科大学）、大江秋津（東京理科大学）



ポスター発表セッション

4. ポスター発表セッションと学生萌芽研究部会ブース

昨年に続き、ポスター発表セッションを開催し、優れた研究に対しては「優秀萌芽研究賞」を授与しました。このセッションは、秋の全国研究発表大会にむけた研究のフィードバックの機会を提供することを目的としており、まさに萌芽を育成することを目指しています。今年は27件の申し込みがあり、活気のあるセッションとなりました。研究内容はDXやSNSなど情報技術に直結するものやマーケティング、人材育成など企業活動に関連したもの、アプローチは事例研究、調査研究、シミュレーションなど、JASMINならではの多岐にわたる研究報告がなされました。また発表者も、学生だけではなく教員や社会人の方々の発表もあり、学術と実務の知識が行き交う場となりました。特にoViceでの開催となり、気軽にさまざまなポスターの発表に足を運び、報告に耳を傾け、また発表者と交流することができました。

審査の結果、4件の研究が「優秀萌芽研究賞」

に選出されました。受賞した研究は、シミュレーションやデータ分析など高度なスキルを駆使して、SNS、対面コミュニケーション、多様性など現代社会を反映したトピックに取り組んでおられ、いずれも今後の発展が楽しみな研究でした。

また今回、ポスターセッションにおいて学生萌芽研究部会のブースを設けました。この研究部会は学生会員のネットワークを形成し交流を促進することで、多様な萌芽的研究を生み出すことを目指しています。ポスター発表セッションでは、多くの学生が参加することから、研究部会の活動を紹介し、メンバーとメンバー以外の学生会員との交流の機会となることを期待してブースを設けました。ポスターセッション中は発表もあることからブースを訪れる人は少なかったものの、セッション終了後の交流の時間には多くの学生がブースを訪れていました。

5. 大会を振り返って

参加者の方々のアンケートの自由記述では、講演内容やポスター発表セッションの研究に対して肯定

的なご意見をいただいた一方で、oViceに関しては肯定的なご意見とともに、操作に戸惑ったなどの否定的なご意見もいただきました。次年度以降、年次大会をどのように開催し、またどのようなツールを使うかも検討していく必要があると感じています。リモートワークが進む中で対面の良さが見直されている一方、これからはリモートで集まりを持つことがスタンダードとなっていく可能性もあります。新たな大会の方法を模索しつつ、かつ多くの人が参加

できる仕組みを考えていく必要を感じています。今後の大会運営に生かすためにも、皆様からご意見をいただければ幸いです。

今回の大会は講演者、発表者、参加者、そして準備に関わってくださった多くの方々のご協力によって無事終えることができました。この場をお借りして、大会に関わってくださった皆様に、御礼申し上げます。